



～茎数は平年並、幼形期の栄養診断で適切な追肥を～

1 生育状況（7月6日現在）～草丈は平年より短い、茎数は平年並～

○7月6日現在の生育状況（あきたこまち、5地点平均）は、草丈は46.8cmで平年比92%、茎数は598本/㎡で平年比99%、葉数は10.5葉で平年差+0.3葉、葉色は43.2で平年比95%となっています（表1）。

○6月下旬の気温は平年並で、日照時間は多くなったため、分けつの発生が多く、茎数は平年並になったと考えられます。また、日照時間が多かったことから、葉色は平年よりやや低い値となったと考えられます。

表1 水稻定点調査結果（管内5地点 あきたこまちR）

	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
本年	46.8	598	10.5	43.2
前年	58.5	465	10.5	45.3
平年値	50.6	602	10.2	45.7
平年比・ 差 (%, ±)	92%	99%	+0.3	95%

7月6日調査

○1か月予報（仙台管区气象台7月2日発表）によると、東北地方の向こう1か月の気温は、高い確率が50%となっており、降水量はほぼ平年並の見込みです。

7月 日	上旬			中旬		下旬	
	1	5	10	15	20	25	31
生育	最高分けつ期			幼穂形成期		減数分裂期	
	10葉期			11葉期		12葉期	
水管理	中干し	間断かん水 ※あきたこまちRの場合				湛水管理	
	中干し	間断かん水			湛水管理（出穂前後各3週間）		
				カドミウム吸収抑制対策の湛水管理は8月下旬頃まで			
作業	★斑点米カメムシ類対策						
	斑点米カメムシ類対策 ～畦畔除草～					草刈り禁止期間※	
	※稲の出穂10～15日前から収穫2週間前まで。ただし、出穂期10日後頃の薬剤散布後7日以内に一度草刈りを実施する。						

2 水管理のポイント ～幼穂形成期の時期に注意して中干しを～

○中干しは、遅くとも幼穂形成期までには終了してください。幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂粒数が減少するおそれがあるため、十分に乾かない場合であっても幼穂形成期前には、中干しを終了してください。

○減数分裂期から穂ばらみ期にかけて低温（日平均気温20℃以下の低温または最低気温17℃以下）が予想される場合、幼穂形成期に入ったら水深を10cm程度に保つ深水管理を10日間程度実施してください。

○あきたこまちR以外の品種については、カドミウム吸収抑制対策が必要です。カドミウム吸収抑制対策として出穂前後各3週間は常時水を張り、田面が空気に触れないようにしてください。また、長期間の湛水管理に備え、中干しは遅れないようにしっかりと行ってください。

○あきたこまちRはカドミウム低吸収品種であり、対策期間中の湛水管理は必要ありません。そのため、中干し終了後は間断かん水とします。

3 追肥 ～幼穂形成期頃の栄養診断に基づいて判断～

○あきたこまちの追肥は、幼穂形成期に栄養診断を行い、右表の栄養診断図に示したⅠ～Ⅴ型の生育状況を目安に判断してください。ただし、肥効調節型肥料の基肥を施用した場合は、生育量と施肥量、肥効特性および地温等を総合的に考慮し、慎重に行ってください。

○生育が過剰（右表Ⅵ型）な場合は、倒伏軽減剤の使用を検討してください。

表2 各生育型の追肥量の目安

生育型	窒素追肥量 (kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
Ⅰ 型	2 kg	2 kg
Ⅱ 型	2 kg	2 kg
Ⅲ 型	ムラ直し 1 kg	2 kg
Ⅳ 型	なし	2 kg
Ⅴ-1 型	なし	ムラ直し 1 kg
Ⅴ-2 型	なし	ムラ直し 1 kg
Ⅵ 型	なし	なし

(注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

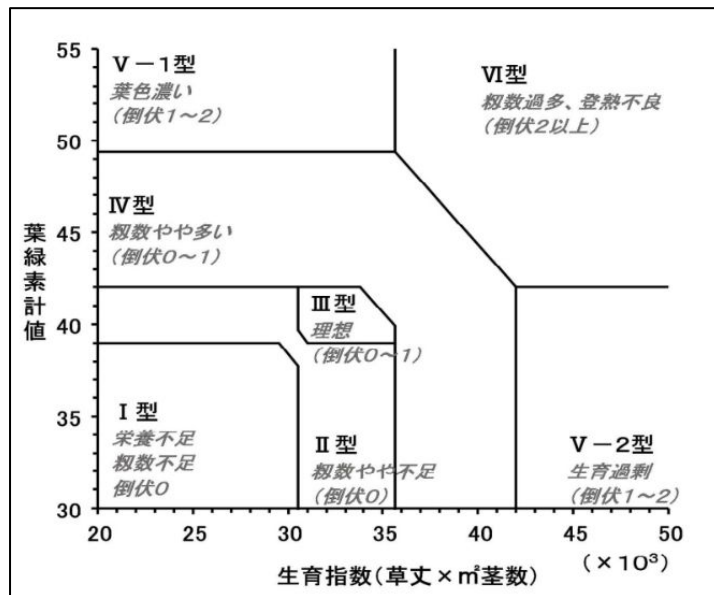


図1 幼穂形成期における栄養診断（県北）

表3 時期別理想生育量（県北）

	幼穂形成期			減数分裂期		
	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 (SPAD)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 (SPAD)
上限値	62	586	42	74	529	40
理想値	60	552	40	72	504	39
下限値	57	519	39	69	479	38

(注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

4 主要病害虫の防除対策

①いもち病

○ほ場を確認し、葉いもちの発生状況を確認してください。葉いもち防除剤を使用した場合でも、持ち込みによる発病ほ場では防除効果が十分に発揮されないため、病斑を確認した場合、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシンまたはノンブラス）を散布してください。

○葉いもちの発生が確認されているほ場では、穂いもち防除として、出穂15～7日前にコラトップ剤またはゴウケツ粒剤（サンブラス粒剤）を散布するか、出穂直前（ビーム剤またはトライフロアブル）と穂揃期（ラブサイド剤またはトライフロアブル）に茎葉散布を行います。

②斑点米カメムシ類

○斑点米被害軽減のため、畦畔や農道等の草刈りは稲の出穂15～10日前まで徹底して行い、イネ科雑草の除去に努めましょう。

○水田内にホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエの残草があると、アカスジカスミカメの増殖を助長するので、水田内の雑草対策を徹底しましょう。

熱中症対策には環境省の熱中症予防情報サイトを活用下さい



※クマにご注意下さい
クマに関する情報は
こちらから



秋田米栽培情報LINE
県内の水稻生育状況や水稻・大豆の技術情報、異常気象対策などの情報を発信しています。

